

# イネ縞葉枯病情報第1号

令和元年6月17日  
愛知県農業総合試験場  
環境基盤研究部病害虫防除室

ムギ類から採取したヒメトビウンカの縞葉枯病ウイルス保毒虫率が  
過去10年で3番目に高くなっているため、注意が必要です！

## 1 ヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率調査の結果

県内22地点のムギ類圃場から採取したヒメトビウンカのイネ縞葉枯病ウイルス保毒虫率調査の結果、保毒虫率が7.0%となり、過去10年で3番目に高くなっています。特に西三河地域では、保毒虫率が高い地点があるため(図1)、注意が必要です。

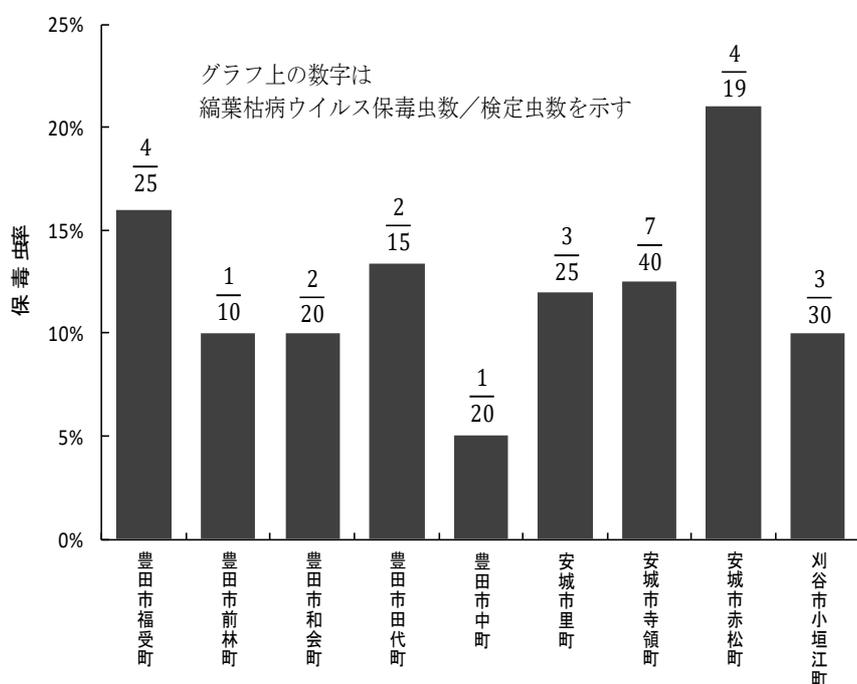


図1 ヒメトビウンカの縞葉枯病ウイルス保毒虫率  
(西三河地域；簡易ELISA法により検定)



図2 ゆうれい症状

## 2 イネ縞葉枯病について

本病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病で、ウイルスを保毒したヒメトビウンカにイネが吸汁されると感染します。

イネが本病に感染すると、葉先が「こより状」に垂れ下がり枯死します(ゆうれい症状；図2)。また、穂が出すくんだり、不稔になったりすることにより減収します。

ヒメトビウンカは、幼虫で水田周辺のイネ科雑草等で越冬し、4月上旬頃に成虫になりムギ畑に飛来して一世代経過し、増殖します。その後、成虫が水田に飛び込み、保毒虫がイネにウイルスを感染させます。また、本ウイルスは経卵伝染し、次世代も縞葉枯病を感染させます。

本県で栽培されている「あさひの夢」、「ゆめまつり」、「あいちのかおり S B L」、「大地の風」などは本病に抵抗性ですが、「コシヒカリ」などは感受性であるため、注意が必要です。

### 3 防除対策

抵抗性品種の作付けが少なく、ヒメトビウンカを対象に育苗箱施薬を実施していない地域や不耕起V溝直播栽培で、殺虫剤の種子塗抹を実施していない地域では、表を参考に、水田に侵入する成虫と次の世代の幼虫を対象として幼穂形成期までに本田防除を実施しましょう。

表 ヒメトビウンカに対する主な本田防除薬剤

薬剤名	使用時期	使用方法	本田での使用回数	IRACコード
MR. ジョーカーEW	収穫14日前まで	散布、無人ヘリコプターによる散布	2回以内	3 (A)
トレボンEW	収穫14日前まで	散布	3回以内	3 (A)
トレボンエアー	収穫14日前まで	無人ヘリコプターによる散布	3回以内	3 (A)
スタークル液剤10	} 収穫7日前まで	散布、無人航空機による散布	3回以内	4 A
スタークルメイト液剤10				
スタークル豆つぶ	収穫7日前まで	散布	3回以内	4 A
ダントツ水溶剤	収穫7日前まで	散布	3回以内	4 A
ダントツ粒剤	収穫7日前まで	散布	3回以内	4 A

IRAC コードは殺虫剤の作用機構による分類を示す。

IRAC コードの詳細は、[http://www.jcpa.or.jp/lab0/pdf/2018/mechanism\\_irac03.pdf](http://www.jcpa.or.jp/lab0/pdf/2018/mechanism_irac03.pdf) を参照する。

農薬の散布に当たっては、ラベルの表示事項を守るとともに、他の作物や周辺環境への飛散防止に努めましょう。